

聖書:使徒の働き17章16～34節

説教:死者の復活

はじめに

パウロとシラスは見習い生のテモテを連れて、地中海沿岸の町を巡りながら伝道の旅を続けています。テサロニケでは、パウロがユダヤ人の会堂でキリストの死と復活を語ると、ユダヤ人だけでなく、町の有力なギリシャ人男性や女性も救われていきました。ところがパウロが語る福音を信じようとしないユダヤ人たちは、ねたみに駆られて町のならず者をやとって騒ぎを起こさせ、パウロたちを町から追い出してしまいます。そんなことにめげるようなパウロではない。次に向かったベレアという町でも、いつもと同じようにユダヤ人会堂に入って宣教すると、人々はパウロが語っていることを確認するために毎日聖書を調べ、そのとおりだとわかると多くの人たちが救われていきました。ところが、その町にもユダヤ人が追いかけてきて騒ぎを起こしたので、シラスとテモテを残してパウロ一人だけアテネに逃れます。

アテネは、かつてソクラテスやプラトンという人たちが活躍し、世界中から学生たちが集まってくるような哲学の町です。そんな独特の雰囲気があったアテネでパウロはどのように伝道したのか。そこから私たちはどのようなことを教えていただくのか、ともに考えてまいります。

1 異邦人への宣教

1) 新しい話を聞かせてください

アテネという名前は、ギリシャ神話に登場する十二の神々の内のアテナという女性の神を守護神として祀る意味でつけられたそうです。そんな町ですから町中が神さまだらけで偶像で一杯だった。日本でも古い町に行くと、道や家の角などにお地蔵さんが置いてあったり、小さな祠があったりしますが、それに似ています。

パウロは、これまでのやり方を変えて広場に行っているいろいろな人に語りかけて伝道しています。教会用語ではこれを「路傍伝道」といいます。いま日本でこういうことをしようとするすと「怪しい宗教」と思われて避けられる。では、パウロはどうしているいろいろな人と話ができたのか。そこはやっぱり哲学の町であったということ大きい。私はエピクロス派である。いやいや私はストア派である。そんな人たちが毎日議論しているような町ですから、パウロが新しい話をするというので、かえって興

味を持って聞いてくれる。知的好奇心が非常におう盛であった。

2) アレオパゴス

そんなことをしているうちに、パウロに強い興味を示した人たちが現れ、アレオパゴスに行つて是非詳しく話を聞かせて欲しいということになった。アレオパゴスはアテネの丘の上にあつて、市役所や裁判所、大学の機能が集まっているようなところで、今でいえば町の大ホールのようなものでしょう。そこに行つて是非福音を語ってくれと頼まれた。こうして向こうからチャンスが転がり込んできました。

2 伝道

1) 「知られていない神に」

そこでパウロはどのように語ったか。22, 23節。「パウロは、アレオパゴスの中央に立つて言った。『アテネの人たち。あなたがたは、あらゆる点で宗教心にあつい方々だと、私は見ております。道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られていない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけたからです。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。』」

いろいろなところに偶像を置いてある町です。そこに住んでいる人たちにどのように語るか。パウロは考えた。いきなり「偶像はダメです」と言っても伝わりません。そこで逆の手を考えた。この人たちはとにかく神と呼ばれるものはなんでもありがたいと思っている。それでも飽き足らずに「もしかしてまだ知らない神がいるかもしれない。知らないからといって無視するのはよくない。そこで『知られていない神』と刻んで、漏れがないように拝んでいた。パウロはこのことを切り口にして、「では、みなさんがまだ知らない神を教えましょう」ということではじめます。新しい話を聞きたくてうずうずしている聴衆ですから、ここで身を乗り出したでしょう。

2) 天と地と人を造られた神

24節。「この世界とその中にあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません。」

神は天と地とその中のあらゆるものを造られた。聖書の創世記に書かれています。ギリシャ神話にも世界を支配する神々がいるので、アテネの人たちにはすんなり受け入れられたでしょう。パウロは続けてこう語る。「手で造られた宮にお住みにはなりません。」考えてみれば当たり前です。この世界のすべてを造られた方なのに、その神は住む家がないからと言って祭壇を作ったり、金や銀、石で神のかたちを刻んでみたり、食べるものが必要だと言ってお酒や食べ物を供える。これの一つでも怠ると、神は怒りだしてわざわざいがかかる、みな思い込んでいる。パウロは言う。でもよく考えてみてください。神のほうが私たちのためにいのちと息と万物を与えてくださっていたのですよ。そんな神がどうしていまさら住む家がないと困るというのですか。それはおかしいでしょう。けれども人間は、偶像を造りたいと思うのはどうしてか。神がもともと私たちを神を求めさせるようにしてくださったから。

3) すべての人に悔い改めを命じている

この国の有名な詩人もこう言っていますよね。「私たちは神の中に生き、動き、存在している。」「私たちもまた、その子孫である。」確かに聖書によれば、私たちはアダム神に造られた神の子孫です。子孫なので自然に神を求めるようになっている。ところがみなさんは、そんな大切な神を金や銀、石で刻んでつくって拝んでいる。これは大変な罪ではないですか。神への侮辱ですよ。そうしたら神はどうされるのでしょうか。

30節。「神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。」

最初「宗教心のあつの方々だ」と持ち上げてから、悔い改めを命じていますというところまで、パウロの語り方はまことに理路整然としています。皆は理屈っぽい話しは慣れているので、厳しいことばでも「なるほど」と聞いたと思います。しかしこの先はどうだったか。

4) この方を死者の中からよみがえらせた

31節。「なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

お立てになった一人の方とは、イエス・キリストのことで、おそらくパウロはこのことについて

は後で詳しく言うつもりだったのでしょう。ところが死者の復活の話しをするとあからさまに鼻で笑う態度に変わってしまう。理屈が大好きです。どんなに難しい話しでも食らいついていくけれど、死んだ者がよみがえるなどという話しはあり得ない。真剣に聞くような話しではない。そんなふうにさっさと見限ってしまいました。

3 イエスと復活を宣べ伝える

1) たとえ笑われても

似たようなことはみなさんも経験があるでしょう。一生懸命福音を伝えたいと思っても、死者の復活の話になると、「まさか」という顔をされてしまった。イエスの弟子の一人であるトマスでさえそうだった。彼は、「釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言いましたが、だいたい自分はもうどうだったのか。イエスが死からよみがえられました、と初めて聞いたときどう思いましたか。実を言えば私は信じられなかった。

いまクリスチャンですと言っている私たちでさえ、初めて福音を聞いたときはこんな状態です。まして、世の人たちにどうやって伝えていくのか、どうやったら信じてもらえるのかと悩みます。

2) 宗教心にあつの方々

パウロはアテネでどう語ったか。町が偶像だらけで内心腹が立ったけれど、「偶像はだめ」と言いません。「あらゆる点で宗教心にあつの方々です」と肯定的に語りました。この語り方は、おおいに役立ちます。

家に仏壇があつてお彼岸、お盆、家族の命日ことあるごとに仏教の儀式がある。職場に神棚があるという方もいます。クリスチャンとしてそんな家族や親戚とどう折り合いをつけるか葛藤します。家族に福音を伝えたくてもとても難しいとあきらめてしまいます。

しかしものごとは、悪いこともあればよいこともある。仏壇を熱心に拝んでいるということは、宗教心にあつということでもある。神のことを伝える切り口があるということです。実際、私の身内の葬儀があつたときのことですが、ある親戚からキリスト教ではどのような葬儀をするのかと質問されて、そこから福音を語ったことがありました。

反対に全然宗教に関心がない場合を考えてみてください。あのドラマがおもしろかった、あのレストランがおいしかった、そういう話しをしている

人には、福音を語れと言われても難しい。けれども宗教に全然関心がないように見えた人でも、いつか自分や家族の健康のこと、人間関係で悩むことがある。そんなとき、以前ならば笑って聞こうともしなかった人が、よみがえりのいのちの話を真っ直ぐに聞いてくれるかもしれない。

3) 確証（信仰）を与えてくださった

31節に「神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです」とあります。「確証」と訳している言葉は、「信仰」と訳されている言葉と同じなのです。誰のために、イエス・キリストは死者の中からよみがえられたのか。私たちすべてのため。どんな目的のためにイエス・キリストが死者の中からよみがえられたのか。すべての人が信仰を持つため。

よみがえられたイエスを目で見たら信じます、と多くの方は言います。でもそれでは信仰ではない。目で見えてはいないけど、確かにそうであると信じる。多くの人たちは笑います。けれどもそんな中からも、信じる者たちが起こされました。たとえ多くの人たちが笑おうとも、必ず信じる人たちがその中にいる。神はすべての人を救おうとしておられる。私たちは先に信じた者として、このみことばを世の人たちに伝えたいと願います。